



神戸女学院時代と思われる岡田美知代  
(撮影年月日不明、田山花袋記念文学館蔵)

## 岡田美知代覚書① 「美知代おばさん」原博己

日本自然主義文学を代表する文豪・田山花袋、その代表作である『蒲団』のヒロイン・横山芳子にはモデルが存在する。女流文学者の岡田美知代である。花袋は『蒲団』のほかにも、『麦』『縁』『丘の家』『幼きもの』などにも岡田美知代をモデルにした人物を登場させている。

岡田美知代は明治末から大正末にかけて、小説や少女小説、翻訳などを数多く発表した。短編集『花ものがたり』（一九一七年）や、ストウ夫人の『アンクル・トムズ・ケビン』の本邦初完訳『奴隷トム』（一九二三年）も手掛けている。

岡田美知代が晩年を庄原市で過ごしたことは、意外と知られていない事実である。原博己さんに、当時の思い出を寄稿していただいた。原さんは岡田美知代を文学の師と仰ぎ、最後まで献身的に仕え、支えた方である。

一九五七年の初秋、晩年の田ミチヨ（花袋の妹）を訪ねた。十九歳の時だった。それまでのイ

メージにあった岡田美知代は、いかめしく取りつきにくい感じだった。

私が初めて美知代おばさんを見かけたのは、小学校の一年（一九四五年）か二年の頃だった。私の家のすぐ近くに金森店という食料品、日用雑貨、酒、塩類、タバコなどの小売りの販売店があった。美知代おばさんは時々買物に

来ていた。英語交じりの甲高く歯切れのいい言葉には方言は微塵もなく、表情も外国の人かと思ふほどだった。珍しくて、一挙一動を息を凝らして見ていたような気がする。

服装も黒系が多く、田舎ではめつたに見かけない洋装で、いつも黒っぽい帽子をかぶっていた。靴も黒のハイヒールだった。いまから思えば、舗装もされていない砂利道を、よくぞ歩かれたものだと思う。

英語が話せる人だと思ったのは、時おり言葉の端々に、英語らしき短い単語が飛び出すからだった。もちろん、女流文学者だという話は聞いたこともなかった。

通称はアメリカ帰りの花田（アメリカで再婚した夫の姓）の奥さん、花田のおばさんと言われていた。それから十余年後、私が美知代おばさんの家を訪問することになるとは、思いもかけぬことだった。

訪問の目的は、英語を習うことだった。当時の私は、NHKの朝のラジオ番組の基礎英語をテキストで独習していた。ご近所に美知代おばさんの親戚筋で同年輩の方がおられ、美知代おばさん宅に行くことを勧められた。

初訪問の日、途中、山裾の櫛紅葉（はぜもみじ）が美しく、鮮明に記憶に残っている。自宅の背戸（裏口）に出て、少し登って山裾の出雲街道を歩いて行った。距離にして一キロ下ると、天満宮神社の鳥居が見える。その鳥居から少し登った参道の手前に縦（もみ）の巨木が聳えている。その脇を抜けて参道を横切る。参道の両脇は杉の巨木で、昼間でも薄暗い。そこから約二十メートルで美知代宅の庭先に出る。茅葺の一軒家、ご近所は遠く離れていた。

玄関先に立つと、明るいガラス障子の部屋の窓際の文机で、何か書いておられるようだった。

「ごめんください」

少し緊張していた。顔を上げられた。

「どなた？」

のどかな声だった。子供の

頃、感じていたいかめしい顔ではなく、穏やかな優しい笑顔だった。「おあがりよ」

気が抜けるほど気さくに声をかけてくださった。私が訪ねることを事前に知っておられた様子にも見受けられた。分家八谷の八谷タカバあちちゃんから話を聞いてくださったのかもしれないと思った。

美知代おばさんの妹・万寿代さんが、川北町の八谷本家の八谷正義氏夫人であり、その縁で八谷本家の別宅で暮しているのだった。正義氏は東京帝国大学を卒業後、万寿代夫人を伴ってドイツに留学、林学博士で台北高等農林の教諭、北海道大学農学部教授を経て、後に庄原市長を二期務めた。



左が岡田美知代（74歳）。  
小説家志望の訪問者とともに、晩年の住居川北町大神宮境内八谷家の別宅にて。  
昭和34年原博己氏撮影、府中市上下歴史文化資料館蔵。

万寿代さんは昭和一七年に夫の赴任先の札幌で、四五歳の若さで病死している。病床の万寿代さんの最後を看取ったのは、アメリカから帰国して間もない美知代おばさんだった。本来の出入り口は重い板戸で、締め切ったまま使われていないようだった。玄関の一段低いところに腰掛ける程度の上り口がしつらえてある。部屋に入ると、天井の高い、明るい八畳一間が生活空間であることが一目で知れた。

縁側を境に、南向きのガラス障子の内側に文机が置かれていた。部屋の中央に蒲団がかかったままの炬燵に机代わりの部厚い樺の炬燵板が一枚、その上には、万年筆、インクスタンズが置かれていた。厚さ尺（約三〇センチ）以上はあるかと思える藁蒲団を背もたれに本を読んだり、書き物をされているのだ。

手近の右脇の机に電気コンロ、炊飯器が置かれていた。部屋の北側の壁際に和ダンス一棹（ひとさお）、ほかに余計なものはなくすっきりしていたが、新聞（読売）、雑誌（小説新潮）、NHKの英会話テキスト、升目を書きつぶされた古い原稿用紙が目についた。新聞には縦横斜めに英語のスペルが書かれ、それさえもなんとなく様になつて整っている感じだった。部屋からの見晴らしも、日当りも申し分なく、落ち着ける雰囲気だった。「コーヒーはお好き？」

自己紹介する間もなく、早速、不器用な手つきで小さな薬缶でお湯を沸かし、布袋にコーヒーの粉を入れて煮だし、接待してくださった。その時、一緒に出してくださった、初めて口にするチョコレートが忘れられなく、未だに私はチョコレートの目がないのである。コーヒー、チョコレートはアメリカ・ロサンゼルス在住の従妹、福井千恵さんから送られてきていた。

初めて訪ねた日、窓際の文机に一冊の古い本が置かれているのが目についた。あらかじめ用意されていたのかもしれない。標題は『奴隷トム』、訳者は永代美知代であった。

私が少年時代に読んで忘れられず、今も心にとどめている三冊の本がある。一冊は山岡荘八の『胸に花を置け』、二冊目が佐藤紅緑の『ああ玉杯に花受けて』、三冊目がアメリカの女流作家、ハリエット・ビーチャー・ストウ夫人原著『アンクル・トムズ・ケビン』である。私が読んだのは新潮文庫、吉田健一訳だった。この原著を日本で初めて全訳したのが永代美知代（岡田美知代）であることは、私にとって想像を絶する驚きだった。美知代訳は一九二三年（大正一三年）だった。

初訪問の日から、ごく自然に、美知代おばさんと言っていた。先生とも、奥様とも言わなかった。

（次号へつづく）

# 島田雅彦 『優しいサヨクのための嬉遊曲』

## —— 経済に回収されたサヨク

「僕は出遅れた左翼学生とでもいうか。家庭の幸福をつくれぬ人間が革命を起こしたら、みんな泣くことになるよ。社会に変化を起こすのは家庭的な人間しかいない。優しい人間でなきゃだめさ」と、サヨクの若者が宣言します。でも、世間では大した反発はなく、屁ぐらいにしか受け止められませんでした。

80年代の政治との決別にとどめを刺したのが、この島田雅彦『優しいサヨクのための嬉遊曲』（83年刊、福武書店）でした。作者、島田雅彦と同じ61年生まれで、外国語大学ロシア語学科の学生である主人公「千鳥姫彦」は、著者そのものようでもあります。

千鳥は、見そめた女性「逢瀬みどり」に、ストーカーよろしく、待ち伏せし、言い寄ります。彼女は、「妹的な女の子」で、脈がなくてもないのです。千鳥の誘いにのってあたりを散歩したり、喫茶店に入ります。

千鳥は、大学では、「人権擁護」を標榜するサークル活動に参加します。というのは、ソビエト文学、ソ

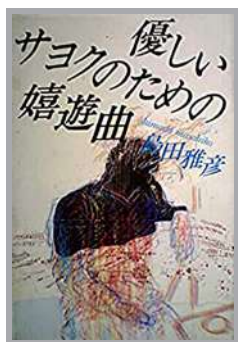
ビエト史の地域研究を進めるうちに、自由を求める反体制運動に同調し、世間へ発信し始めたのです。部室に

動だよ。その意味じゃ、アカだろうけど、アカという呼び方はきらいだな」（千鳥）  
「北方領土の返還を待つわけにはいかない。その間にも（ロシアの）反体制活動家たちは抑圧されているんだからね」（メンバーの1人）

### また読んでみたい本⑥1

青年たちに

音谷 健郎



【福武書店版の表紙】

古今東西の文学にはたくさんの名作があります。そんな名作の中から筆者の心に残る作品を今の青年たちにも読んでもらいたいと思い、毎月1冊ずつ紹介しています。

第61回は、島田雅彦の『優しいサヨクのための嬉遊曲』です。もし興味を持ったらぜひ読んでみてください。

筆者紹介：1944年、旧・庄原町生まれ。新聞記者、大学講師を経て現在、庄原市東本町在住。大阪文学学校講師

は、11人が集まります。ここで彼らの声を拾ってみます。

「団地から仕事に出掛けるように、通いでサヨク運動が出来る。危険はない。趣味のサヨク運動は私にピッタリだ」（千鳥）

「我々のやっていることはサヨク運

「イデオロギーのようなものは不要だ。必要なのは、優しさと知識である」（同）

ま、こんな調子です。やがて、卒業を迎え、学究肌の幹事はフランス留学へ、他は銀行や出版社、大学院へ。何人かは、巷の泥

にまみれるという展開です。政治変革を切実、深刻に受け止めた倉橋由美子『パルタイ』（第53回参照）や柴田翔『されど我が日々……』からほぼ20年、政治運動はこうも変わるものなのでしょうか。

ところで、文芸誌「海燕」（福武書店）に載った島田雅彦のこの作品は一躍、芥川賞の候補にもなります。その新しさとして、「イメージの超現実と軽やかな話法」（大江健三郎）、「“軽み”といたい作風」（開高健）との支持を受けます。一方で「こういう安全地帯に身を置いて才気を発揮している点はどうだろう」（古行淳之介）との指摘もありました。

その後、何回も候補作になりますが、選者の評は、「言語の妙」に注目するだけで、内容に及ぶことはありませんでした。「最後のサヨク小説」は、自然消滅のように消えていくことになりました。

こうして、80年代の経済風潮「ジャパン・アズ・ナンバーワン」の中で、変革の政治気風は、うたかたのように時流に飲み込まれました。これが、時代という力なのでしょう。

次回は、俵万智の歌集『サラダ記念日』を取り上げます。

## 比婆山連峰の自然(6)

著者紹介…一九三一年、比婆郡(現・庄原市)比和町に生まれる。農学博士(九州大学)。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びとと」(シンセイアート出版)から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。

階段状群落はシバを優占種とし、吾妻山山頂近くではイワカガミが多く、ダイセンスマシレ、ホソバノヤマハハコ、キュウシユウコゴメグサが混じり、やや平坦になると、ワレモコウ、マツムシソウ、ノギラン、ネバリノギラン、ダイセンオトギリ、アキノキリンソウが多く見られた。

落は消滅したと考えられる。

現在では標高1200mから標高1180mの間にあつたそのごく一部に(写真1の中央、淡緑色となつて

いるところ)を除き、落葉広葉樹の低木林となり、ごく一部に残る階段状群落は和牛の採食圧から低木叢は解放され、徐々にウリハカエデなどの幼木が入っているから、階段状群落は消滅したと考えられる。



写真1  
現在の吾妻山東斜面(吾妻山植物誌)

木川の支流に設けられた自然遊歩道を登ってくると、烏帽子山と吾妻山の鞍部に到達する。そこで左折すると、烏帽子山、右折しておよそ80m(写真2の中央下部の赤褐色となつているところ)に進んだところまでの



写真2  
1974年当時の吾妻山東斜面の景観(吾妻山植物誌)

約750m(標高1000m)まで、南北は島根県域をふくめて、広いところで約700mに広がる平坦地という。

この大膳原は、かつては写真2のようにシバ草原で、吾妻山の南ノ原や小坊主に比べて斑状群落の発達は悪かったが、みごとなシバ草原であった。

た。しかし、現在はシバ草原は完全に失われ、ススキ草原へ遷移している、落葉広葉樹の幼木が点々と混じっている状態である(写真1)。

なお、余談であるが、大膳原は高位浸食平坦面(高位面)で、中国山地の地形あるいは広島県の地形上、重要な鍵となっている地域である。

池ノ段の頂きに立って北を眺めると、目の前に濃緑に覆われた山が眼に入る。この濃緑に覆われた山が比婆山である。目を凝らしてみると、数本の杉が山頂部に見える。この杉があるところが御陵である。御陵を下って再び登ったところに烏帽子山がある。烏帽子山は比婆山に隠れて見えない。そして、左中央のT字状に淡緑色となつている部分が大膳原の高位平坦面、それに続く峰が吾妻山である(写真3)。

比婆山連峰内では、吾妻山、大膳原以外、池ノ段と竜王山でも和牛の



写真3 比婆山連峰の眺望（1992年小川光昭撮影）

放牧が行なわれていた。池ノ段の場合、頂部から南へ延びる稜線の標高1250m以上の主に東斜面の平坦部、竜王山は標高1180m以上の頂部一帯が放牧地であった。両者合せても大膳原の1/2以下の面積である。

池ノ段では頂部へ登る北東斜面に小規模な段階状群落が見られ、稜線に沿ってシバが見られ、吾妻山の山頂部から南ノ原へ向う登山道同様、ネザサ・ヒロウザサが稜線上の両側

を埋め、ススキ草原はなかった。現在、北東斜面の階段状群落は登山者が利用しているためか、その痕跡は残っているが、和牛の採食圧から開放されたためか、ホツツジなどの低木が繁り、歩くことはできない。また、稜線東斜面の登山道となっている一部を除き、標高1260mあたりはススキ草原となっている。しかし、南端の標高1250mのところにある湿地は健在で、湿原周辺、ところどころにハンカイソウ、シシウド、湿地内にはトキソウとモウセンゴケも多く、湿地内の小渓流ではリュウキンカが見られる。このトキソウとリュウキンカは比婆山連峰内での湿地が唯一の自生地であるから、厳重な保護を要する。

竜王山の場合、マツムシソウ、ウメバチソウ、カワラナデシコ、リンドウ、タンナトリカブト、ツリガネニンジンなどが混じるシバ草原であった。池ノ段と共に県民の森造成にかかわって放牧権が放棄された1966年以降、急速にススキ草原となり、竜王山の場合、登山道のススキは刈り取られているものの、一部ではすでに低木林となり、往時の面影は全く消えている。

## 「つれづれ歌談」⑫

松岡 初枝

・あしひきの山のしづくに妹待つとわが立ち濡れし山のしづくに

大津皇子（みこ）

・吾を待つと君が濡れけむあしひきの山のしづくに成（な）らましものを 石川郎女（いらつめ）

あしひきの、は山に掛かる枕詞です。大津と郎女の歌のやりとりです。あなたを待っていたらすっかり濡れてしまったよ、と大津が言えば、郎女は、あら待たせてしまつて……。私はそのしづくになりたいワ。

郎女は草壁からも歌を寄せられていました。

・大名児（おおなご）を彼方の野辺に刈る草の束の間もわれ忘れめや 草壁皇子

草を刈るほんの束の間も忘れませんと詠んで郎女に寄せますが、

郎女は返歌をしません。そんな時大津は大胆にも

・大船の津守が占（うら）に告（の）らむとはまさしに知りて我が二人寝し 大津皇子

他人の口にも占いにも出たとうり、私と郎女は寝ましたよ、と堂々としていました。草壁は「おのれ大津め」三角関係が即悲劇に結びついたのか。しかしきつかけになつたのは確かなようです。郎女はその後どうしたのか……

・語継ぐからにもここだ恋しきを直目（ただめ）に見けむいにしへ壮士（おとこ）『菟原娘子（うな いおとめ）を偲びて』

・勝鹿（かつしか）の真間の井見れば立ち平（なら）し水汲ましけむ手児名（てこな）し思ほゆ『真間手児名を偲びて』

二人の庶民の乙女はどちらも美しく、若者達が争って求婚しました。西の葦屋（現芦屋市）東の真間（現市川市）どちらも我が身が男達を争わせる、と思いつめて自死します。二首は後の世の万葉人が昔の美人を偲びました。

「美しいって罪なのね……」あなたならどうしますか？

「まさか、妊娠してるとは思わなかったわね」

そう言って美和がテーブルに頬杖をついた。考え事をするときの癖なのだ。腎臓病の野良猫、アヤの点滴治療で動物病院に通っていた。それで、アヤが妊娠していることがわかったのだ。

「やっぱり、治療をしながら産むのは無理なのかな？」

アヤは明日、避妊手術を受ける予定になっていた。当然、胎児も処分される。

「体に負担がかかるし、歳もかなりいってるようだしな」

ドクターの見立てでは、アヤは十歳前後ではないかと推測している。胎児の数が二匹と少ないのも、年齢が関係しているらしい。

「お父さんはわたしが賢太を産むときにも、反対だったから……」

とぼちちりもいいところだ。「あれはおまえが妊娠中毒で……」

三十代後半の高齢出産で、このままでは母体も危ないと医師に告げられた。美和は憤然と転院して、違う病院で賢太を産んだ。しかし、その病院でも、一時期はかなり危険な状態だったらしい。

「大丈夫ですよ。美和は強い子です

から」

泰然と構えていた妻の景子の笑顔を思い浮かべた。

「あたし、離婚するかもしれないから」突然の爆弾発言だった。

「女か？」

旦那の浮気の愚痴は、何度か聞かされていた。

「遊びも男の甲斐性だぞ」

看護師として美和が勤めていた病

初耳だったが、天国に行ってしまったので、確かめようがない。

「子供ができたって、相手の女から電話がいったの」

それはきついな。それはきついな。

「産ませるつもりはないって、旦那は言うの」

札束で尻を拭うということか。あの男らしい。

「それを聞いて、なんだか白けたとい

いない。最初は逃げ出さないように首輪にリードをつないでいたが、おとなしいので襖を閉め切っておくだけにしていていた。

「お医者さんの話を聞いてたんじゃない？ それで逃げ出しちゃったとか」

おどけた調子で言ったが、笑えない冗談を言うのが美和の悪い癖だ。

「大丈夫、腹が減ったら帰って来るさ」

そう言って賢太の頭を撫でてやった。カリカリの餌を入れておいた皿は、空になっている。

「やあ、みんなお揃いだね」振り向くと、髭面の大男が立っていた。

「耕一郎！」姉に名前を呼ばれて、男がヨオとばかりに片手を上げた。

何も言葉が出てこない。ただ、やつれた髭面を睨んでいた。我が家の長男、そして新聞の報道が正しいのであれば、クレジット会社を相手にした詐欺事件の重要参考人として、警察から指名手配されているはずだった。

熱い茶漬けを無理やりかき込んで、風邪薬を飲み込んだ。

## 病猫狂詩曲2

ラプソディ

あきふゆひこ  
亜木冬彦

現代御伽草子 ⑤7

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

院に、草野球で足の骨を折った田島が入院して来たのだ。中古車販売のオーナー社長で、言わば玉の輿だった。

「お父さんも遊んだの？」

「わしは甲斐性なしで、金も機会もなかったからな」

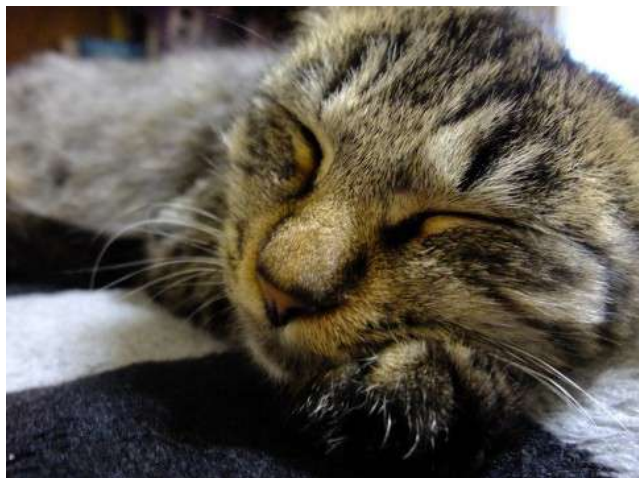
「うまく逃げたわね。お父さんはモテたのよ、て、お母さん、自慢してたわよ」

うか、余計に心が醒めちゃって……」思わず頷いてしまった。「大変だよー」賢太が走り込んで来て、大人の会話は終了した。

「アヤちゃんがいなくなっちゃった」賢太に急かされて、居間に行った

が、アヤの姿が見当たらない。スパーでもらってきたお気に入りの段ボール箱、バナナの空箱にも入って

熱い茶漬けを無理やりかき込んで、風邪薬を飲み込んだ。



「今日は止めといた方がいいんじゃないか。顔が赤いよ。猫も消えちまつたし、もう稼ぐ必要はないじゃないか」

記録的な早い梅雨入りで、雨の日が続いている。

「新聞は、毎日配達するもんだ」

それに……、秋には美和が賢太を連れて帰って来る。新しい家具の一つも買ってやりたい。

カップを手歩きだそうとして、足元がふらついた。

「今朝はおれが配達してやるよ」

カップを強引に取り上げられた。

「いきなりじゃ、無理だ」

「おやじが作った地図があるじゃないか」

さすがによく観察している。鳶(とんび)が鷹を産んだとよく言われたものだ。成績優秀で、働きながら公立大学の夜間部を自力で卒業した。大手の都市銀行に入ったのだが、五年で退社した。

「銀行がやっていることはヤクザと同じだ。ただ、合法か非合法かの違いがあるだけだ」

バブル崩壊後の不良債権処理に銀行が苦しんでいる時期だった。それからは、ときどき顔を見せるだけで、何をやって生きているのかわからない。母親が亡くなってからは、実家にも寄り付かなくなった。

カップを着込んだ耕一郎を見て、笑いをこらえた。ツンツルテンで、両手足がかなりはみ出ている。

「身元がバレたら、警察に通報されるぞ」

「そうだったら、仕方がないさ」

投げ出すように言った。何も言えなかった。

「今日、東京に帰るよ」

ぼそりと告げた。

「金はできたのか？」

やばい筋の金を借りているらし

い。警察に出頭して服役する覚悟はあるのだが、それを清算しておかないと、無事に出所することはできない……。いくら必要なかと訊いたが、新聞を百年配っても足りないよと鼻で笑われた。怒りを抑え込んだ自分が情けない。

「どうにかね」

髭面の青白い顔に笑みを浮かべた。ずっと部屋に籠ってパソコンの操作をしていた。外国為替だとかFXとかいうインターネットを使った商売なのだそうだが、話を聞いてもチンプンカンプンだ。

「全部終わったら、帰って来てもいいかな？」

目が哀願している。

「この歳になつて、土の大切さがようやくわかったよ」

「百年早いわ！ わしはまだ、わかつたらん」

配達が遅れるからと、耕一郎を雨中に送り出して、食べ終えた茶碗を台所に運んだときだった。

(うん?)

土間に置いたバナナの空き箱に何が

アヤが甘い声でニヤアと啼いた。

子猫が二匹、つぶらな瞳で見つめている――。

## まつの古本屋さん どろ書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・無料本、百円本、50円本などのコーナー。無料の漫画ルームもあります。
  - ・地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
- ※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週月・火曜日(2月は店内整理で全休)
- TEL: 090(9913)3052
- 営業時間 9:30 ~ 18:30

※広島銀行庄原支店の手前(三次側から)※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

< 広告料 1/4 ページ 1回 2,000円 半年間 9,000円 1年間 15,000円 >



どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

## 「街のはなし」

吉村昭 著 文春文庫

エッセイというと軽妙洒脱さがもてはやされているが、ゴツゴツと生真面目な「随筆」集。タイトルもストレートで武骨、吉村昭という名前も本名なのである。月刊誌に連載した79篇の作品が載っているが、改頁しないで空気が無いのも作者の意向のような気がする。

芥川賞作家の津村節子さんが奥さんなのが、二人のやり取りがおもしろい。作者は日記を毎日コツコツ書いて、津村さんはその日記を借り受けて、毎年1月に前年の日記をまとめて書くのだそう。



読者に阿ることがないのにクスリと笑える。人間観察が的確で深いのだと思いついた。ブレない芯があればこそである。

## 「第七官界彷徨」

尾崎翠 著 河出文庫

人間の五感と第六感、第七官とはそれを越えた感覚なのだという。恋情もその一部か。その第七官に響くような詩を書きたいと願う赤いちぢれ毛の少女・町子は、炊事係として兄たちの住む貸家に同居することになる。従妹の三五郎は音楽受験生で、壊れたピアノでコミックオペラをうたい、精神病院に勤める長兄の一助は患者の少女に恋している。農学生の一助は癖(こけ)の恋の研究のために肥を煮詰めている。



吉本バナナのような新感覚の世界だが、発表されたのは昭和4年。完全に忘れられた作家が脚光を浴びるのは40年後のことである。悲劇の作家として語られるが、彼女の遺した作品は今でも版を重ねている。

## 「台所太平記」

谷崎潤一郎 著 中公文庫

官能小説の大家が、台所を題材にした小説を? 不思議に思って読み始めたが、まさしく台所の女中さんが主人公の物語なのである。千倉家の昭和14年から33年までの女中さん列伝。主である磊吉(らいきち)は文筆業で生計を立てているので、自分の家庭をモデルにしていると推測される。いつかは谷崎文学の神髄が……、いやいや最後まで磊吉は保護者の目



で若い女中たちを眺めている。それだけ個性が浮き上がる。

わずかにレズビアンの中中が登場するのだが、磊吉は手厳しく糾弾して家から追い出している。こういう世俗的なユーモア小説も書けるのだと、文豪の懐の深さを堪能。

## どら書房 << 貸本屋システム >>

- ・ 店内で販売した本は、どら紙幣(店内専用通貨)であれば半額、現金であれば3割で買い戻します。※破損や汚れがあれば値引
- ・ 書籍購入⇒読了⇒どら紙幣と交換⇒新たな書籍購入、貸本のような感覚でご利用ください。

## どらくる俳壇&歌壇

※参加を歓迎します。

万葉の詩心令和の風薫る

近藤 昌平

難聴や敏き目鼻よ栗の花

富久光

一島に薫り広がる花蜜柑

片岡 正人

鯉のぼり少なくなりて村静か

隆愚

慇懃に殿様蛙あいさつに

大槇 三代子

病猫やみねこの啼き声愛し五月闇

赤川 冬人

白薔薇の甘き香りの花束を

松岡 初枝

連れ来し女ひとは笑顔の八十歳

## 投稿&寄稿

候のことば

「暦の入梅」

隆愚

今年には史上二番目の早い梅雨入りだと発表がありました。現在では、気象庁が状況を見て発表するわけですが、暦の上での入梅は、太陽の黄経が八十度に達する日とされ、毎年、六月十一日前後になります。

梅雨入りのことを栗花落(ついでり)とも言います。梅雨の季節に咲く花に、栗の花があります。しとしとと降る雨のなか、栗の花が咲き散ることから、この字をあてたそうです。入梅とも言いますが、中国ではもともと、黴(かび)が生えやすい時期なので「黴雨(ばいう)」と言っていたそうですが、音も同じことから「梅雨」と書くようになったとか。

梅の実が熟する時期とも重なります。

梅雨の月があつて白い花

種田山頭火

## 「病猫実話版2」

赤川仁洋

飼猫のドラマが餌を食べなくなつて動物病院を受診、検査の結果、腎臓機能が弱くなっているのが判明して、ドクターの指示に従つて週二回の点滴に通つていた。

四回目のときだった。目が白いと貧血が疑われて検査、ヘモグロビンの数値が通常の半分しかない。原因を調べるために外部機関に血液検査してもらつたが、いちばん疑われた寄生虫も陰性、結論は自分の免疫が血液成分を攻撃、破壊しているという難病。ネットで調べると、免疫性溶血性貧血という病名が出てきた。

症状がどんどん悪化、入院してステロイド(免疫抑制作用)注射をしてもらったが、改善せずに家に連れて帰つた。不思議なことに、腎臓は正常値に近い数値に戻っている。できるだけそばに居て、看取るつ



もりだったのだが、それから徐々に回復して、好物の煮干しを催促するまでになった。思うに、ドラマは元々警戒心が強い猫で、それこそ病院が死ぬほど怖かったのだ。その恐怖心が免疫異常を起こしたのではないか。

やれやれ、また平穏な時間を過ごせるなど安堵したが、二週間ほどして急変、最後の望みを託して病院で点滴&ステロイドの注射をしてもらったが、力尽きた。

最後の二日間はいつ死んでもおかしくない状況だったが、部屋で本を読んでいたわたしを、悲鳴のような啼き声で呼んでくれて、最後を看取ることができた。

# どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など  
情報掲示板です。

## 一 硬式テニス参加者募集 一

MTEC (Miyoshi Tennis Enjoy Club)

場所：三次運動公園の屋内&屋外コート

・火曜日 (9:30 ~ 12:00)

・水曜日 (9:30 ~ 12:00)

・土曜日 (10:00 ~ 12:00)

連絡先：中川 (☎070-8991-1682)



## 6月の「九日市」中止のお知らせ

「しょうばら九日市」へのご協力&ご支援、感謝いたします。さて、現在日本ではコロナ禍の第4波が襲来、広島県も新型コロナウイルス感染拡大防止集中対策の取り組みを行っている最中です。庄原市内でも感染者が多数出ている状況下では、6月9日(水)の九日市は中止せざるを得ないと判断いたしました。

楽しみにされている方も多いと思いますが、どうかご理解をお願いします。安心して開催できる日が来ることを心より願っております。

今後ともよろしくをお願いします。

令和3年6月 九日市愛好会

### 《情報&原稿を募集します!!》

- 仲間募集
- 教室&講座案内
- イベント情報
- あなたの大切な本の紹介
- ボランティア・ライター(現地記者)募集!

※応募先はどら書房・赤川まで。  
掲載は無料です。

### どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載して  
いるので、ダウンロードして  
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

### 徳岡政暁 陶芸作品コーナー

陶芸家、画家(徳岡佛性坊)として多彩な活動をしてきた故・徳岡政暁氏の陶芸作品の展示販売を、どら書房の一角で行っています。

茶碗や花器、陶板や料理皿、多様な作品を展示しています。あなたのお気に入りの逸品が見つかるかもしれません。

※天井が低いので頭上注意!

### どら書房無人野菜販売コーナー

新鮮で安全な野菜を店頭で販売(値札のないものは百円均一)。  
毎週水曜日の朝に入荷予定。

●黒ニンニク好評販売中!●

(青森産ニンニクホワイト六片使用)

甘みと適度な酸味、ニンニク臭さはありません。  
ポリフェノールを含み、抗酸化作用、滋養強壮などの  
効果が期待できます。

(80g入り 500円)

※売り切れのときはご容赦ください。

発行：どら書房  
〒727-0012  
庄原市中本町 2-1-10  
☎090(9913)3052(赤川)  
e-mail: touzin@nifty.com

誌面デザイン: ROUTE183  
協賛: 九日市愛好会

◇早々の梅雨入りには驚きました。庄原市内での新型コロナウイルスのクラスター、広島カープの選手のクラスター……、梅雨空のようなどんどんとした話題が多いですね。こういうときはじっくり構えて、水の底まで足が着くまで我慢。ワクチンに期待です。  
◇今月号もわたしの猫ネタに付き合っていたいただき、ありがとうございます。ペット・ロス、いや、友達ロスでしょうか。書くことで、喪失感もいくらか和らぎました。

### 編集後記

◇原博己さんの「岡田美知代覚書」は、資料的な価値も高いエッセイです。純朴な青年の目を通して、庄原縁の著名な女流文学者の晩年の姿が鮮明になります。